

「記憶の街」模型で再現



模型で復元された古里の景色を前に、思い出話で盛り上がる地区出身者ら。石巻市の河北総合センターで

津波被害の石巻・大川地区

「在りし日」に涙

東日本大震災の津波で大きな被害を受け、地区の大半が「災害危険区域」に指定された石巻市大川地区。地区住民や大学生らによるプロジェクト「記

再会して思い出に浸ったり、時に涙したりしながら、震災前の記憶を分かち合っている。

「三條さんの家」「桜の木の下で花見をした」「シジミを選別したところ」……。地区の街並みを500分の1で再現した模型には、住民が語った思い出が「記憶の旗」に刻まれ、立てられている。

このプロジェクトは、震災で失われた地域の風景や記憶を保存しようという取り組みで、神戸大や名古屋大、立大、愛知淑徳大、東北工大のゼミや有志の学生も参加している。

昨年11月と今月、地区出身者が多く暮らす仮設住宅団地などでワークショップを開き、住民に聞き取りしながら旗を作った。大川地区の中でも、災害危険区域となった「尾崎・長面地区」と「釜合・間垣地区」（計約400世帯）を再現した。

展示初日の15日には、住民らが多数訪れ、

「涙が出そう」「ここにこれあったね」という声が会場に響いた。家があった長面地区や生まれ育った釜合地区を見つめていた永野秀子さん(70)は「時々家のあった場所を見に行き、またここに住めたら、いつも思う。模型で昔の景色を見て『ここがふるさとなんだ』って、体をすーっと風が吹き抜けたような気分になった」としみじみと話した。

制作には、地元若者も参加した。長面地区の自宅が被災した大学生の永沼悠斗さん(22)は「地域の人の笑顔や涙を見て、模型があるからこそ引き出される思い出や言葉もあるんだと分かった。模型を活用して、津波の記憶だけでなく、ここにあった風景や地域のひととのつながりの強さも、子や孫の世代に伝えていきたい」と力を込めた。

18日まで。展示時間は午前10時～午後4時と午後6～8時。同日



は午後4時まで。入場無料。同日午後2時から、制作に協力した神戸大の槻橋修准教授や永沼さんらが語り合うシンポジウムもある。

【百武信幸】